

アキラへの鎮魂歌

…八月が来るたびに…

山田 清一郎

私はトマトが食べられない
ジリジリと熱い夏の陽が照り返すアスファルト
「拾うか もらうか 盗むか」
孤児の生きる道は それしかなかった

「野良犬」と追われ 「バイキン」と呼ばれながら
それでも 今日を生きる「えさ」を求めて
町をさまよう 孤児たち
露店に並ぶトマトを盗み アキラは走った
アキラは逃げた ただ走った トマトを抱えて 追われながら

そして……車のタイヤの激しくきしむ音
アキラの叫び声は 消されて聞こえなかった
ジープの下に隠れた アキラの小さなからだ

つぶれたトマトが アキラの血に染まっていく
流れ出した血が道路を 赤く赤く染めていく
「アキラ アキラ」と呼ぶ声が
血に染まったトマトの中に消えていく

動かぬアキラのからだのそばで
真っ赤なトマトだけが 流れ出す血の中で動いている
それはアキラの心臓の鼓動のように

わずか10歳で トマトの中に散った「いのち」
呼んでも二度とかえらぬアキラ

アキラの魂は 空襲で殺された
母ちゃんや ばあちゃんのところに 行けるのだろうか
一人ぼっちで
あんなに 父ちゃんの帰りを待っていたアキラ
小さな「いのち」は トマトを抱いて散ってしまった

八月が来るたびに トマトを見るたびに
悲しみがよみがえり 心の傷は 消えることはない
「アキラ おまえの分まで生きてやる」と
固く心に誓ったあの日……
あれから60年過ぎた

今も 私はトマトが食べられない

1946年8月—トマトの中に散ったアキラに捧ぐ—

